

「海外教育実地研究2023」における アメリカの小中学校での授業実践報告

松浦 武人・木下 博義・中島 敦夫・田中 佑明
大岡 紘子・沖坂 柚香・澤田 侑奈・川口知佐子¹

Report on Teaching Practices in United States Elementary/Secondary Schools
in “Overseas Education Field Research 2023”

Taketo MATSUURA, Hiroyoshi KINOSHITA, Atsuo NAKASHIMA,
Yuki TANAKA, Hiroko OOKA, Yunoka OKISAKA,
Yuna SAWADA and Chisako KAWAGUCHI

Abstract: This study discusses the teaching practices in elementary/secondary schools in the United States. The participants were four graduate students and one in-service teacher. They observed classes in two North Carolina public schools and planned and conducted English classes on Japanese society and culture. Their main outcomes were as follows: 1) They developed practical teaching skills by teaching students from different cultural backgrounds. 2) They gained the ability to design, implement, and evaluate programs to promote global partnerships. Furthermore, they were also more motivated for future teaching development.

Key words: global education, teaching practice, teaching development, cross cultural understanding
キーワード：グローバル教育、教育実践、教職開発、異文化理解

I. はじめに

本稿は、広島大学大学院人間社会科学研究科教職開発専攻教育実践開発コースの選択科目「海外教育実地研究」の取り組みについて報告するものである。

「海外教育実地研究」は、広島大学の大学院の再編(2020年4月)にあたり、「教育による持続可能で平和な世界の構築を目指し、日本の教員養成と世界をつなぐことを意図した科目」として、教職開発専攻(以下、教職大学院と記す)が開設した授業科目(「海外教育実地研究」, 「ユニバーサルマインドの授業開発」, 「グローバルマインドの授業開発」)の一つである。また、この授業は、旧教育学研究科の選択科目(「体験型海外教育実地研究」)を教職大学院の選択科目として引き継いだものであり、2016年度に広島大学に教職大学院が設置されて以来、本年度の参加者を含めて、計21名の教職大学院生が参加している。新型コロナウイルス感染拡大のため、2020年度から2022年度までの3年

間は、米国への渡航・教育実地研究は中止となったため、教職大学院の選択科目「海外教育実地研究」としては、本年度が第1回目の実施となった。

本稿では、「海外教育実地研究」の概要を示すとともに、本年度の参加院生の報告をもとに、取り組みの成果と課題をまとめる。

II. 2023年度「海外教育実地研究」の概要

(1) 「海外教育実地研究」の目標

「海外教育実地研究」の目標は、「海外の学校において、教育関係機関の見学及び授業実践研究を行い、高度な実践的指導力を育成するとともに、グローバル教育推進に必要な資質を育成する。」としている。

(2) 「海外教育実地研究」の授業展開

本授業は、大きく、①渡航前の事前研究、②米国での教育実地研究、③帰国後の事後研究の3つの内容で

¹ 京都女子大学附属小学校

構成されている。

① 渡航前の事前研究

2023年度の事前研究の実施状況は以下の通りである。

- 4月24日(月) 本授業科目の説明会(授業の目的・概要・全体日程等)
- 5月9日(火) 授業研究テーマ事例の紹介
- 5月30日(火) 授業研究テーマ案の交流・テーマの設定
- 6月13日(火) 学習指導案(和文)の検討
- 6月27日(火) 学習指導案(和文)の検討
- 7月5日(水) 学習指導案(英文)の検討
- 7月11日(火) 学習指導案(英文)の検討
- 7月25日(火) 学習指導案(英文)の検討
- 8月23日(水) 授業の準備状況の確認, 教材・教具の検討, 渡航関係書類の確認
- 9月11日(月) 最終事前打ち合わせ(授業準備状況, 出発当日の確認)

渡航前の事前研究では, 授業テーマの設定, 教材, 学習指導案(和文, 英文)の検討を授業内で行うとともに, 広島大学附属東雲中学校及び小学校の英語科・外国語科の担当教員から, 学習活動及び学習指導案(英文)についての助言をいただいた。また, 米国の受け入れ校(ノースカロライナ州ローリー市内のエクスプローリス小学校および中学校)の先生方と学習指導案を共有し, 教材・教具, 学習活動についての具体的な確認を行うとともに, 助言をいただいた。

② 渡航・現地での日程

2023年度の米国での教育実地研究の実施状況は以下の通りである。

- 9月18日(月) 広島出発, 米国ノースカロライナ州ローリー到着
- 9月19日(火) ローリー市内の博物館等見学, 授業準備
- 9月20日(水) エクスプローリス中学校訪問, 授業実施, 授業見学・施設見学
- 9月21日(木) エクスプローリス小学校訪問, 授業実施, 授業見学・施設見学
- 9月22日(金) ワシントンD.C.へ移動, スミソニアン博物館等見学
- 9月23日(土) 平和記念碑・スミソニアン博物館等見学
- 9月24日(日) ワシントンD.C. 出発, 機内泊
- 9月25日(月) 広島到着

米国での教育実地研究の中心は, 院生による米国の小・中学校での授業実践研究である。2023年度の授業実践研究は, ノースカロライナ州ローリー市内にあるエクスプローリス小学校, 中学校で実施した。また,

授業実施以外にも, 校長による学校説明, 児童(アンバサダー)による学校案内, 全校朝会への参加, 小中合同教員研修会への参加などの機会を得た。

③ 帰国後の事後研究

帰国後の事後研究として, 10月27日(金)に, 米国での全実施授業について参加者全員でふり返り, 改善案について検討した。また, 今後, 12月に最終報告会を開催する予定である。

(3) 2023年度の授業

2023年度は, 4名の教職大学院生(ストレートマスター)及び1名の教職大学院修士生(現職教員)が授業を行った。2023年度の参加院生及び修士生が開発・実施した授業の「授業テーマ」, 「対象学年」, 「授業のねらい」, 「授業の概要」, 「成果と課題」, 体験を通しての「自己の変容」を以下に示す。

Ⅲ. 参加者の教材開発・報告

【授業A】 教職開発専攻 田中佑明

(1) 授業テーマ

Let's enjoy "One day of Daruma"

(2) 対象学年：小学校第3学年

(3) 授業のねらい

日本の子どもとアメリカの子どもの遊びには, 共通点もあるが相違点もある。例えば, 日本には「だるまさんの一日」という遊びがある。これは, アメリカの遊びでいう「Red light, Green light」と「Simon Says」を組み合わせたような遊びである。共通しているのは, 鬼が後ろを向いている間に鬼に近づく点である。相違点として, 鬼が振り向いた際に「だるまさんの一日」は鬼の命令に従うのに対し, 「Red light, Green light」はその場に立ち止まるという点がある。このように日本の遊びとアメリカの遊びには共通点や相違点があり, 他の国の遊びとも違う。本授業ではそういった相違点に気付く活動を通して, 互いの文化に興味を持ち, 異文化理解のきっかけづくりを図ることをねらいとした。

(4) 授業の概要

- ① 導入では, 自己紹介を行い, 「だるまさんの一日」と「Red light, Green light」の説明を行った。その際に, だるまとは願いを叶える縁起物として日本人に親しまれているものであることを伝えた。
- ② 「だるまさんの一日」のルール説明を行った(子どもの遊びポータルサイトミックスじゅーちゅ, 2016)。その際に, 日本のA小学校の児童が「だるまさんの一日」を遊んでいる様子の動画を見せながら, 説明を行った。また, 「寿司を食べる」

や「剣道をする」などの日本独自の動作を伝えた。

- ③ 「だるまさんの一日」をする活動を行った。だるま役をする児童に対して、スムーズに動作を伝えることができるように補助をした。
- ④ 「だるまさんの一日」の実践後、イギリスやフランス、スペインにも似たような遊びがあることを伝えた（世界の民謡・童謡，2023）。

(5) 成果と課題

本授業実践の成果は3点挙げられる。一つ目は、運動をする活動が主であったため、ルールが理解できていない児童でも楽しむことができたことである。「だるまさんの一日」の実践では児童たちが全力で楽しみながら取り組んでいた様子が伺えた。言語がなくても、運動をすること・身体を動かすことは世界共通で楽しい・面白いということがわかった。二つ目は、ルールの説明時にジェスチャーを用いたことにより、理解を促進できたことである。説明の際に、ジェスチャーを用いたため、児童の中には同じジェスチャーをして理解している児童も見られた。三つ目は、「だるまさんの一日」の実践後に他の国にも似たような遊びがあることを伝えたことで、違いに反応する様子が伺え、気づきを促すことができていたことである。

課題は2点挙げられる。一つ目は、自身の英語力が低く子どもたちと会話がスムーズにできなかったこと、説明がうまく通じない場面が見られたことである。そのため、児童の質問にうまく答えることができず、活動内容を詳細に伝えることができなかった。二つ目は、「だるまさんの一日」の実践時に、メリハリがなかったことである。実践を20分ほど行ったが、終盤になると児童の中には退屈しているような児童の様子が見られたため、実践の間で集合し、追加ルールの設定やその説明を考慮しておく必要があった。

(6) 自己の変容

この度の実地研究を通して、以下のことが自己の変容として挙げられる。

1. 英語に対する意識の変化があったことである。私自身英語に対して苦手意識があり、大学受験を終えて以来英語の学習を避けてきた。しかし、実地研究を通して、自身の英語力の低さや言いたいことが伝わらないもどかしさ、伝わった時の喜びや嬉しさなど多くのことを経験することができた。このような経験を通して、英語をもっと話せるようになりたいという気持ちや、もしまだ挑戦できるのであれば児童とよりコミュニケーションを取れる状態になりたいという思いが芽生え、英語学習をしたいと思うようになった。
2. 言語の壁があったとしても、体育をすること・運

動をすることは、楽しく活動をすることができることを実感したことである。また、ジェスチャーなどの非言語コミュニケーションも、同じく児童と交流する上で重要だと感じることができた。これらのことは、日本の小学校に在学している外国人児童にも通ずることであると考えるため、今後の教師生活や指導に活かしていきたい。

授業実践だけでなく、実地研究中のアメリカの滞在でも多くのことを学ぶことができた。お店での注文、支払い時の会話、美術館の鑑賞、街の方に道を聞くなどアメリカでしか経験することができないことを体験でき、高校までの英語力だけでなく、日常の英会話の知識が必要だと感じた。こういった経験を、小学校の教員になった際に、外国語の授業で児童に共有し、日常生活につながるような授業づくりをしていきたいと考える。

【授業B】 教職開発専攻 大岡紘子

(1) 授業テーマ

Let's make an original "kabuto"!

(2) 対象学年：小学校第5学年

(3) 授業のねらい

戦国時代、武士たちは戦に行くとき、兜と鎧を身にまとっていた。鎧や兜を用いることで、身を守ることにつながっていた。兜は頭部を守る防具としての役割の他、武将の威厳や地位を表す物として使用されており、数多くの戦国武将は、自らの宗教観や人生観を反映させたオリジナルの立物を付けた兜をかぶっていた（刀剣ワールド，2023）。現在では、端午の節句において、子供が病気などの厄災から身を守るために兜が飾られているところもある（一般社団法人日本人形協会，2023）。また、大リーグのエンゼルスでは、ホームランを打った打者が、祝福の「かぶと」をかぶるパフォーマンスがニュースになっている。

本授業では、日本の伝統的な折り紙の手法を使って「かぶと」を作り、児童一人ひとりがオリジナルの立物をつくる活動を通して、日本文化について知る機会を設けようとした。

(4) 授業の概要

導入では、パワーポイントを用いた自己紹介と、現在大リーグで活躍している大谷翔平選手が兜をかぶっているシーンを活用し、兜について親近感を持たせる取り組みをした。

展開前半では、兜について説明をした。兜は戦国時代に頭を守るために活用していたことや、現在どんな場面で兜を使っているかについて説明をした。現在の兜は、端午の節句の時に使い、病気などの厄災から守

る象徴であることを強調し、戦いのためだけに使うものではないことを伝えた。

展開後半は、新聞紙でつくる「かぶと」と「かぶと」についている立物についての作り方を説明した。その後、「かぶと」と立物の作成に取り組んだ。立物の作成が主な取り組みになるため、兜を途中まで作成し、配布した。また、立物の作成に関して、子供たちが自由に発想できるように折り紙やシールなどを複数用意し、自由に作ってもらった。

活動後は、お互いにどんな兜をつくったかを紹介し合い、最後に記念写真を撮影した。

(5) 成果と課題

Exploris E.S. で、第5学年を対象に、新聞紙を使ったオリジナル兜づくりを実践した。その実践を通しての成果と課題について述べる。

成果は2点ある。1点目は、「かぶと」をすべて子供たちに作らせるのではなく、2工程を残して途中まで作ったことである。そうすることで、ほとんどの子供たちが少しの時間で「かぶと」を作成することができた。最後の過程を子供自身にさせることで、完成できたことに喜びや達成感を感じている印象があった。準備は大変だったが、用意していたよかったと思った。2点目は、児童の発想が豊かになる、楽しめる内容になったことである。実際作業している子供たちは、話しながら楽しんで作成に取り組んでいる様子だった。人それぞれ個性あふれるものを作ることができており、図工は日本と同じように楽しんでもらえるのだと認識できた。

課題については2点ある。一つ目は、英語の表現で伝わらなかったときの対応の仕方である。自分の英語に課題があることは理解していたため、原稿を作り英語で分かりやすく伝えられるように、あらかじめ工夫をしていた。しかし、伝わらなかったときに、私が子供たちに申し訳なさを感じて謝る回数が増えてしまったことで、自信がないような授業になってしまった部分がある。謝りすぎは相手に不安を与えることにもつながるので、今後は気を付けたい。二つ目は、マネジメントに関して、自分の意図を伝えるのをあきらめてしまったことである。上記に述べたように英語に自信がなかったこともあり、その場の先生の指示に従い、自分が考えていた内容を一部変更して行った。何か月もかけて考えた指導案だからこそ、自分がしたいことをもっと先生に伝えるべきだったと思った。

(6) 自己の変容

英語の授業実践を行い、コミュニケーションをとるためには、相手の国の言語も学ぶことが重要だと感じた。私は英語を学ぶことに苦手意識があり、これまで

あまり海外の方と話すという機会がなく、受験のための英語が主になっていた。しかし、今回の研修では、英語を通して現地の先生と会話をして、国によつての価値観の違い、学校の教育内容について知ることができ、難しい単語を用いるよりも、思いを伝えようと積極的に話すことが大切だと思った。日本だけでなく、世界の人々と関わりやすくなった現代だからこそ英語学習の必要があり、会話をするために日々話す練習をしたいと思った。

【授業 C】 教職開発専攻 沖坂柚香・澤田侑奈

(1) 授業テーマ

Let's make English Haiku!

(2) 対象学年：中学校第8学年

(3) 授業のねらい

俳句は、日本を象徴する文化の一つである。季語を含んだ五・七・五のリズムの中で、その人の個性や感性が存分に生かされる。俳句という一日本文化を紹介し、実際に英語俳句を作る活動を通して、異文化理解・交流を深めることを本授業の目的とし、以下の3項目を本時の目標と設定した。

- (ア) 短いリズムの中にメッセージを込めることができる。
- (イ) 四季の良さを実感し、季節を楽しもうとすることができる。
- (ウ) 異文化交流の楽しさを実感できる。

(4) 授業の概要

- (ア) 導入では、パワーポイントを用いて本時の目標の共有、日本の四季についての紹介を行った。その際、ヒマワリや紅葉といった日本の季節を象徴するような画像を用いることで、生徒が日本の四季を感じたり、季節について考えたりするきっかけとなるように留意した。
- (イ) 展開前半では、日本の俳句についての説明を行った。パワーポイントを用いて、五・七・五や季語などのルールを日本の代表的な俳人である正岡子規の句「柿食えば 鐘が鳴るなり 法隆寺」を例示しつつ解説した。次に、英語俳句についての説明を行った。英語俳句のルールについては、現在時制を用いること、3行詩とすること、季語を用いること、動詞・前置詞・冠詞はできるだけ省略することの4点とした(伊藤園, 2023a; 伊藤園, 2023b; The Japan Times, 2013)。例とともに英語俳句について解説した後、季語を連想する活動を行った。授業実践日が9月であったため、連想する季節は秋とした。紅葉や秋桜の画像

を提示しつつ、生徒自身に秋の単語について連想させた。

(ウ) 展開後半では、実際に英語俳句を作成する活動を行った。4～5人の班で考えや情景を共有しながら作成を行った。また、作品には日本郵便の季節のイラストのポストカードを用い、早く俳句が完成した生徒には、事前に準備していた折り紙や和風のシール等を用いてポストカードをデコレーションするよう指導した。

(エ) 終末では、完成した俳句を班で一人選び、「Best of Haiku」として全体で発表する活動を行った。また、作成した作品や折り紙はプレゼントし、集合写真を撮影した。

(5) 成果と課題

本時の成果として、2点挙げられる。一つ目はT2の良さを生かした授業が行えたことである。授業者2人が会話の掛け合いをしながら授業を進めることで、生徒が授業に入り込みやすく、意欲的に授業参加してもらえたと考える。また、机間指導を分担することで、俳句という難しい題材をフォローする、細やかな支援ができたと考える。悩んでいる生徒には、秋といえば何が思い浮かぶ？という問いかけをすることで、thanks giving dayやapple cider等のアメリカの風物詩を想起させることが出来た。二点目は、題材だけでなく、細かな工夫で日本の文化を楽しんでもらえた点である。日本らしさのあるポストカード、和風のシール、折り紙などを用意したことで、生徒たちには、より日本文化を身近に感じ、異文化交流を楽しんでもらえたのではないかと思う。

一方、課題として、俳句のルールを上手く伝えられなかった点が挙げられる。英語俳句のルールそのものが曖昧であったことを考慮し、分かりやすい例を提示出来れば良かったが、“spring is here”という表現を例に用いたために、生徒の俳句にも“Autumn”や“Fall”を直接季語として用いる作品がみられた。間接的に季節を感じさせる俳句の奥深さや、季節の魅力を、俳句で表現させられなかったことが悔やまれる。

(6) 自己の変容

日本語が通じない地でコミュニケーションをとったり、授業を行ったりすること、日本とは全く違う文化に触れること、全てが新鮮に感じた研修であった。日本では出会うことのない多様な文化に触れ、視野が広がった。

また、英語で授業実践をしたことはもちろん、授業内外でアメリカの生徒や先生方と話をすることで、ジェスチャーや表情を駆使して意思を伝えることが出来る

と学んだ。英語力が不十分であることを感じつつも、コミュニケーションをとりたいという姿勢を示すと、相手が理解しようとしてくれることから、次第に伝え合うことに楽しさを覚えた。コミュニケーションにおいて重要なのは、積極性であると学んだ。

今回のアメリカへの渡航では、歴史や食文化はもちろんのこと、教育現場においても日本とは全く違った教室や授業の雰囲気、大事にしている価値観を目の当たりにした。日本におけるおもてなし、思いやり、もったいないといった日本の精神の良さを改めて実感出来た。この経験は、今後の教員生活をはじめとして、社会生活でも大きな財産となるだろう。

【授業D】教職開発専攻卒 川口知佐子

(1) 授業テーマ

Let's reproduce Choju Giga

(2) 対象学年：中学校第6・7学年

(3) 授業のねらい

国語の教科書（光村図書、2023）の説明文で扱われている「鳥獣戯画」は、これまで担任した子どもたちと何度か学習し、模写した経験があった。筆遣いを学ぶことができると同時に、模写を通して作品の魅力を感じることができた。模写した際には、全員が見応えのある作品を仕上げることができた。

この経験をもとに、アメリカの子どもたちに「鳥獣戯画」を題材に授業を行えば、筆文化と漫画文化の両方に興味を持ち、異文化理解ができるのではないかと考えた。

日本の漫画は、海外でも「Manga」と言われる程、人気がある。アニメも世界中で注目されている。また、筆で文字を書くことは日本の文化である。そこで、本授業のねらいを次のように設定した。

○アメリカでも人気である日本の漫画のルーツとして、最古の漫画と言われる「鳥獣戯画」という作品を知り、模写することを通して日本の筆文化に親しむことができるようにする。

○鳥獣戯画を通して、「漫画・アニメ」「筆（毛筆）」「京都」に興味を持ち、異文化理解ができるようにする。

(4) 授業の概要

①自己紹介及びアニメ・漫画の紹介

自己紹介として、京都で小学校の教師をしていること、京都の紹介として寺や神社が多いことを話し、御朱印帳を見せて筆文化へ興味を持つことができるようにした。漫画を数点紹介し、好きな漫画があるかどうかを聞いた。「進撃の巨人」「僕のヒーローアカデミア」などが挙がった。

②鳥獣戯画を知る

パワーポイントを使って、鳥獣戯画が日本で最古の漫画と言われていること、京都の高山寺に伝わっていることを紹介した。巻物を見せた後、鳥獣戯画のウサギやカエルが出てくる場面を取り上げ、何をしているところかを問うた（京都国立博物館、2014）。「戦っている」「逃がっている」などの意見が出た。

③練習

筆の練習をするために、半紙に自由にかく時間を設定した。自由にかきたいものをかくクラスと、模写を意識して鳥獣戯画の場面をかくクラスがあったが、子どもたちの実態や様子に任せた。

④模写する

A6程度の大きさを模写することができるよう枠を用意し、場面を選び、模写した。机間指導を行い、筆が進まない児童に筆の持ち方を実際に見せたり、上手な子どもの作品を評価したりした。

⑤作品の交流

お互いの作品を見合う時間を設けた。席を離れてクラスメイトの作品を見て、お互いに賞賛しあった。

⑥ふり返り

授業の感想を聞いた。「楽しかった。」「面白かった。」という発言があった。



(5) 成果と課題

子どもたちが導入の漫画から興味を持ち、鳥獣戯画を楽しみながら模写することができていたことは大きな成果である。題材がよかったと考える。実際に巻物・図録・漫画（コミック）などを用意して見せたことや、準備を行い、スムーズに模写に取り組むことができたようにしていたことで、迷うことなくかくことができていた。芸術に力を入れている学校だったため、筆（絵筆）の扱いに慣れていたようで、想定していたよりも器用に、上手に、筆を扱っていた。

第6・7学年の計4学級で授業をさせていただいたが、学級の実態に応じて、子どもたちの思いや興味を

大事にして臨機応変に授業を行うことができた。練習の時間は、鳥獣戯画とは関係なく自由にかいているクラスと模写しているクラスがあったが、そのクラスの子どもの受け止めや意欲を大事にできた。

課題としては、形を捉えることが難しく、模写が上手にできない子どもに対して、英語で支援ができなかったことが挙げられる。一緒にかくなど試してみたが、なかなか場面を捉えて、上手にかくことができなかったため、英語で伝えることができる力が必要だった。また、お互いの作品を交流した後に、上手にかくことができていた友達を推薦したり、教師が取り上げたりして、共有する場を設けると鳥獣戯画の動きや特徴に着目できたと考える。

(6) 自己の変容

英語で授業をするということで、不安であった。しかし、つたない英語でも、子どもたちは興味・関心を持って学習することができていた。視覚的支援を意識しパワーポイントや実物を準備したり、短い文章で伝えたりすることで、言葉の壁が低くなった。改めてこれまでの自分の授業をふり返ると、日本では、思いのまま伝えることができる話し言葉に頼りすぎていると思った。英語で授業する本実践を通して、言葉での理解がまだ十分とは言えない小学生だからこそ、視覚的支援や短い言葉での説明や指示が必要であると気付かされた。

私の授業の後に、一人の女の子がわざわざ「楽しかった。ありがとう。どうしても伝えなかった。」と御礼を言いに来てくれた。このときの感動を忘れず、日本でも子どもの心に残る授業ができるようにしていきたいと強く思った。

IV. 本年度の授業の整理と考察

(1) 本年度の授業

本年度、参加院生が開発した授業は、いずれの授業も導入において日本の文化に対する理解を図るとともに似たような海外の文化との比較を取り入れる等、興味・関心を引き出した上で、その後に体験活動（A：だるまさんの一日で遊ぶ、B：折り紙でが「かぶと」を作る、C：季節の俳句を詠み、ポストカードを作る、D：鳥獣戯画の模写をする）の場を設定している。日本の文化の理解を図るだけ（日本文化紹介・伝授型の授業）でなく、対象学年の発達段階や児童生徒の実態に応じた教材開発の工夫を通して、米国の児童生徒が日本の文化を実体験する場を構成すること（日本文化体験型授業）ができたことは、一つの成果である。また、授業Aでは、終末に日本やアメリカ以外の国の

遊びを紹介する場を設定する、授業Bでは「かぶと」の立物や装飾をアレンジして作る場を設定する、授業Cでは、日本の四季の写真を紹介し、アメリカの秋の風物詩を想起して季節を取り入れることを意識する場を設定する、授業Dでは、事前に筆の練習を行い、筆遣いに慣れ親しむ場を設定するなど、日本の文化の理解を踏まえた思考・表現の場、創造的な活動の場を設定すること（文化比較型授業、文化創造型授業）ができたことも成果としてあげられる。これらの成果は、事前学習において、過去の体験型海外教育実地研究の授業を考察する機会をもったことによるものである。また、交流校の教員と連携を密にとり実態に合わせた支援を適切に行うことができたことも成果の要因になっている。海外の学校の児童生徒がより主体的に参加できる日本文化体験型授業、文化比較型授業、文化創造型授業を創造する院生等の授業感の高まりを図ることができた。

(2) 自己の変容

「自己の変容」の報告から、体験型海外教育実地研究が、院生にとって、次の認識の変容を促すものである。・海外の人々との交流の重要性や意義を再認識する。・外国語を学び習得することの大切さを実感し、学んでいこうとする意欲を高める。他国の文化や教育について理解することの大切さを認識する。・我が国の文化や精神の良さを再認識する。・様々な文化に住む人々と交流していくための積極性の大切さを認識する。・ジェスチャー等の非言語コミュニケーションの大切さを認識する。・授業における視覚的や短い言葉による説明や指示の大切さへの気付き等である。これらの認識の変容は、教師のグローバル化に対応した教科や教職に関する専門的知識の向上に資するものである（中央教育審議会、2014）。

V. 終わりに

本実地研究は、コロナ禍の影響もあり4年ぶりに行われた。日本の公立学校において在日外国人児童生徒が増加している現状や10年後20年後の将来、我が国の児童生徒が国際社会で活躍するために必要とされる資質・能力を育成していく上で本実地研究の果たす役割は大きいと考える。今回参加した院生等は自身の視野を広げるとともに自国及び他国の文化を大切にしてい

こうとする姿勢をもつことができた。今回得た視点は、日々の学級経営や授業づくりで生かしていくことのできるものである。現在、教職大学院を修了した院生は、100名を超えるが、海外実地研究を経験した修了生が学校現場に与える影響は、今後ますます大きくなっていくことが期待できる。また、今回の実地研究には、修了した現職の教員が参加した。今後、現職教員の更なる参加や様々な地域・文化における交流も視野に入れ、令和の時代における実地研究の発展について期待していきたい。

引用・参考文献

- 中央教育審議会（2014）「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」。
一般社団法人日本人形協会（2023）「端午の節句」
Retrieved from <https://www.ningyo-kyokai.or.jp/sekku/tango/> (accessed 2023.11.2)
- 伊藤園（2023a）「英語俳句とは…」 Retrieved from https://itoenshinhaiku.jp/assets/data/en_junior_highschool.pdf?33 (accessed 2023.9.20)
- 伊藤園（2023b）「お〜いお茶新俳句大賞 過去の受賞作品」 Retrieved from <https://itoen-shinhaiku.jp/archive/30/gallery.php> (accessed 2023.9.20)
- 子どもの遊びポータルサイトミックスじゅーちゅ（2016）「だるまさんの一日」 Retrieved from https://45mix.net/darumasan_no_1niti/ (accessed 2023.8.1)
- 京都国立博物館（2014）『国宝 鳥獣戯画と高山寺』凸版印刷。
- 光村図書（2023）『国語6 創造』光村図書出版。
- 世界の民謡・童謡（2023）「世界各国の「だるまさんがころんだ」」 Retrieved from <https://www.worldfolksong.com/sp/kids/song/statues-game.htm> (accessed 2023.8.)
- The Japan Times（2013）「参考資料・英語俳句の作り方」 Retrieved from https://st.japantimes.co.jp/special/eigo_haiku.htm (accessed 2023.9.20)
- 刀剣ワールド（2023）「兜の種類と特徴、立物、面頬、機能」 Retrieved from <https://www.touken-world.jp/tips/11037/> (accessed 2023.11.20)